



Title	ルーマニア語における話題化構文の統語的分析
Author(s)	藤田, 健
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 115, 59-87
Issue Date	2005-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34082
Type	departmental bulletin paper
File Information	115_PL59-87.pdf



ルーマニア語における話題化構文の 統語的分析

藤 田 健

0. 導 入

ルーマニア語はロマンス諸語に属する言語であるが、他のロマンス諸語には見られない特徴を有することで知られている。統語論の領域においても興味深い現象が数多く観察されるが、本稿が考察対象とする直接目的語を文頭に前置する構文（以下、直接目的語前置構文）もその一つである。この構文において特徴的なのは、前置された直接目的語と同一指示の対格形代名詞クリティックが生起するという点である。この現象はクリティック重複現象として知られているものであるが、ルーマニア語の直接目的語前置構文においてはこのクリティックの重複が義務的なのである。

この構文を考察する上で考慮に入れねばならないのは、直接目的語の格標示である。ルーマニア語では、定の人間を指示する名詞句が直接目的語の場合、前置詞によって標示されねばならないという形態統語的特徴が観察される。これに対して、非人間の実体を指示する名詞句が直接目的語の場合には、前置詞による格標示は行われず、無標の形式で現れる。筆者は藤田（2003）において、この直接目的語の前置詞による格標示の問題に関して生成文法の枠組みでの分析を提示した。本稿の目的は、この議論を土台に、直接目的語前置構文の構造がどのようなものを考察し、それをもとに当該構文においてクリティック重複が義務的である理由を説明することにある¹。

1. 直接目的語前置構文

ルーマニア語では、他動詞文において前置詞によって標示される場合と、直接目的語が無標の格を担って生起する² 場合の2種類の構文が観察される。

- (1) a. Am văzut pe domnul Predescu la hotel.

(I) have seen PREP Mr. at (the) hotel

「私はホテルでプレデスク氏に会った。」

- b. Ieri ai certat pe Ion.

yesterday (you) have scolded PREP

「昨日君はイオンを叱った。」

- c. Văd cartea în bibliotecă.

(I) see the-book in (the) library

「私は図書館でその本を見る。」

- d. Am admirat tabloul.

(I) have admired the-picture

「私はその絵に感嘆した。」

この二つの格標示パターンのうち直接目的語が前置詞によって標示される構文で興味深いのは、直接目的語に対応する弱形対格形人称代名詞³が生起す

¹ 本稿は日本言語学会第127回大会において行った口頭発表を加筆修正したものである。発表の際に、ルーマニア人の言語学者 Ivana Adrian 氏並びに岸田泰浩氏に貴重な助言を頂いた。また、本研究においてインフォーマントとしてルーマニア人の言語学者 Manuela Leahu 氏に御協力頂いた。ここに謝意を表したい。

² ルーマニア語の名詞句は、無標である主格・対格と属格・与格の二つの格標示をもつ。この他の格は、他の印欧諸語同様に前置詞によって標示され、前置詞によって支配される名詞句は対格となる。

ることが随意的に可能であるという点である。この現象はクリティック重複現象として知られている。

- (2) a. (L-)Am văzut pe domnul Predescu la hotel.

(I) him-have seen PREP Mr. at (the) hotel

「私はホテルでプレデスク氏に会った。」

- b. Ieri (l-)ai certat pe Ion.

yesterday (you) him-have scolded PREP

「昨日君はイオンを叱った。」

これに対して、直接目的語が無標の格で生起する構文では、クリティックの重複は不可能である。

- (3) a. * O văd cartea în bibliotecă.

(I) it see the-book in the-library

「私は図書館でその本を見る。」

- b. * L-am admirat tabloul.

(I) it-have admired the-picture

「私はその絵に感嘆した。」

このように統語的に異なった特徴を有する両構文であるが、他言語においても一般的に観察されるように、直接目的語を前置する構文がこの二つの構文にそれぞれ対応する形で存在する。この前置構文で注目すべきは、前置詞の有無に関わらずクリティック重複現象が義務的であるという点である。

³ ルーマニア語の対格形人称代名詞には、強形と弱形が存在する。前者は自立形で、前置詞 “pe” を伴うのに対し、後者は音韻・統語的に動詞に依存するクリティックである。以下では、後者の人称代名詞を対格形クリティックと呼ぶこととする。このような人称代名詞クリティックはロマンス諸語において広く観察される現象である。

- (4) a. Pe domnul Predescu *(I-)am văzut la hotel.
PREP Mr. (I) him-have seen at (the) hotel
「ブレデスク氏には私はホテルで会った。」
- b. Pe Ion *(I-)ai certat ieri.
PREP (you) him-have scolded yesterday
「イオンは昨日君が叱った。」
- c. Cartea *(o) văd în bibliotecă.
the-book (I) it see in the-library
「その本は私は図書館で見る。」
- d. Tabloul *(I-)am admirat.
the-picture (I-) it-have admired
「その絵には私は感嘆した。」

(1), (2)のようなSVOという基本語順の場合と(4)のような直接目的語前置構文の場合に観察される対格形クリティックの分布の対立は、ルーマニア語の文の統語構造を考察する上で極めて重要な示唆を与えるものと言える。

2. 先行研究

ルーマニア語のクリティック重複構文を生成文法の枠組みで包括的に分析した唯一の先行研究と言えるものとして Dobrovie-Sorin (1994) が挙げられる。本節では、直接目的語が前置される場合を含む同構文に対する Dobrovie-Sorin の分析を概観した後、問題点を指摘していく。

Dobrovie-Sorin は、同構文の統語構造を考察する上で、直接目的語が前置される典型的な構文である wh 構文を考察する。まず、この構文においてクリティック重複が不可能な場合と可能な場合があることを観察し、これらが別々の構文であると指摘する。一般に wh 構文では wh 移動が関与すると分析されるが、Dobrovie-Sorin はクリティック重複が不可能な構文では量化が関与するのに対して、可能な構文では量化が関与しないと主張する。それぞれの

例は以下に示される。

- (5) a. Pe cine (*l-)ai văzut?
 PREP whom him-have (you) seen
 「誰に君は会ったの。」
- b. Pe care (băiat) *(l-)ai văzut?
 PREP which boy him-have (you) seen
 「どの少年に君は会ったの。」

クリティック重複が不可能な (5 a) では “*cine*” が量化詞として機能し、痕跡が変項となる。変項は格を持たねばならないが、クリティックが重複すると格がクリティックに吸収されるので、痕跡が変項としての条件を満たすことができなくなってしまう。このため、クリティック重複が許容されないことになる。これに対して、クリティック重複が可能な (5 b) では “*care*” が量化詞として機能しないため、クリティック重複が許容されるのである⁴。この分析を裏付ける現象として、弱交差と寄生的空所の例を挙げている⁵。

⁴ この根拠として、“*care*” は、英語の “*which*” と同様に先行文脈等によってその指示対象の集合が規定されるという意味的特性をもつことが挙げられる。Pesetsky (1987) はこのような要素を D-link される要素と呼んでいる。

⁵ 具体的には次の例に示される。i) が弱交差、iii) が寄生的空所の例である。

- i) *Pe cine_i a certat mama lui_i e_i?
 PREP whom has scolded mother his
 「誰をその母親が叱ったの。」
- ii) Pe care_i l_i-a certat mama lui_i e_i?
 PREP which him-has scolded mother his
 「どの人をその母親が叱ったの。」
- iii) Pe cine_i ai apreciat e_i înainte de a cunoaște e_i?
 PREP whom (you) have appreciated before knowing
 「君は誰に知り合う前に感嘆したの。」
- iv) *Pe care_i l_i-ai apreciat e_i înainte de a cunoaște e_i?
 PREP which (you) him-have appreciated before knowing

Dobrovie-Sorin は、両者の統語的特性の相違は両者の構造的相違に起因すると説明する。すなわち、量化詞である“*cine*”は NP 節点によって排他的に支配されているのに対し、量化詞でない“*care*”は NP 指定部を占め、NP の主要部は空となっている。“*care*”は潜在的には量化詞であるが、NP 全体への量化詞としての素性の浸透がなされないことによって統語的量化詞としては機能しないと分析する。

この分析を基に、直接目的語前置構文や直接目的語関係代名詞が関わる関係節においてクリティック重複が義務的な点についても、疑問詞“*care*”と同様、量化詞でない *wh* 句が移動していると説明する。

直接目的語前置構文や直接目的語関係代名詞節において量化が関与していないという Dobrovie-Sorin の主張は非常に説得的であり、本稿も基本的に採用するものである。しかし、ここではこれらの構文が具体的にどのような構造を持ち、どの要素が移動するのかという点が明示的に示されていない。また、本稿が明らかにしようとする、直接目的語前置構文においてクリティック重複が可能なのかでなく、なぜ義務的なのかという問いに対しては、量化詞でない *wh* 句の場合には変項が存在しないので、代名詞であるクリティックが必要となるという解答を示しているが、その理論的根拠を明快に提示し得てはいない。

3. 直接目的語前置構文の統語構造

本節では、2 節で示した Dobrovie-Sorin の分析の問題点を解決すべく、本稿の分析を提示する。ルーマニア語においては、直接目的語が前置詞“*pe*”によって標示される場合もされない場合も、前置が可能であった。この場合、既に観察したように、前置詞の有無に関わらず前置された直接目的語はクリティックによって重複が義務的である。以下に例を再掲する。

「君はどの人に知り合う前に感嘆したの。」

量化詞として機能する要素は弱交差現象を示し、寄生的空所の生起を認可する。

- (4) a. Pe domnul Predescu *(I-)am văzut la hotel.
 PREP Mr. (I) him-have seen at (the) hotel
- b. Pe Ion *(I-)ai certat ieri.
 PREP (you) him-have scolded yesterday
- c. Cartea *(o) văd în bibliotecă.
 the-book (I) it see in the-library
- d. Tabloul *(I-)am admirat.
 the-picture (I) it-have admired

では、この構文は統語的にどのような構造を持つのであろうか。本節ではまず、ルーマニア語の前置構文が統語的にどのように特徴付けられるかを考察し、続いてこの構文に具体的にどのような統語構造を設定すべきかを示していく。

3.1. 前置構文の統語的特性

ルーマニア語の前置構文がどのようなタイプの構文であるかを考える上で、まず挙げられる可能性は、この構文が次に示されるフランス語等において観察される左方転移構文であるというものであろう。

- (6) Jean, je l'ai vu hier.
 I him-have seen yesterday
 「ジャンには私は昨日会った。」

この文では、前置された要素である直接目的語の“Jean”が対格形クリティックである“l”によって重複されている。ルーマニア語の前置構文においてもクリティックの重複が行われるという点で、この二つの構文は類似しているように見える。しかし、両者には重要な違いが存在する。左方転移構文の特徴として、前置要素と後続要素との間に音韻的な休止が置かれ、書記上はコンマによって表されるが、ルーマニア語の前置構文においてはこの特徴が観

察されない。更に、Dobrovie-Sorin が主張しているように、ルーマニア語の前置構文は島の制約に従うという統語的特性を示す。以下がその例である⁶。

- (7) a. *Pe Ion n-am întâlnit fata care l-a văzut anul trecut.
 PREP (I) not-have met the-girl who him-has seen last year
 b. *Pe Ion am plecat înainte să-l examineze Popescu.
 PREP (I) have left before that-him examined
 (Dobrovie-Sorin(1994))

これらの現象が示しているのは、この構文が左方転移構文ではなく、英語等において観察される、wh 移動が関与する話題化構文であるということである。

- (8) John she loves.

(8)では、直接目的語“John”が対応する代名詞の重複なしに前置されている⁷。ルーマニア語では代名詞が常に重複されるという英語とは異なった特徴が観察されるが、統語的には前置構文が wh 移動が関与する話題化構文であるという前提で議論を進めていく。

3.2. 前置詞によって標示される直接目的語の話題化構文の構造

まず、直接目的語が前置詞“pe”によって標示される場合から考察しよう。

⁶ (7a) は「去年イオンに会った少女に私は会わなかった。」、(7b) は「ポペスクがイオンを検査する前に私は立ち去った。」にそれぞれ対応する文において「イオン」を前置した文である。前者は複合名詞句制約、後者は付加詞条件にそれぞれ違反している。

⁷ フランス語においては、(8)に対応する話題化構文は非文となる。

*Ce livre, j'ai lu.

this book I have read 「その本は私は読んだ。」

Jones (1996)

この理由に関しては、稿を改めて論ずることとしたい。

前置詞によって標示される直接目的語が話題化される場合、クリティックの重複は義務的であった。

- (4) a. Pe domnul Predescu *(l-)am văzut la hotel.
 PREP Mr. (I) him-have seen at (the) hotel
 b. Pe Ion *(l-)ai certat ieri.
 PREP (you) him-have scolded yesterday

この事実、話題化構文において wh 移動が適用されるのは、前置詞によって標示される直接目的語ではないということを示している。既に述べたように、前置詞で標示される直接目的語が動詞に後続する通常の語順の場合には、直接目的語と同一指示であるクリティックの生起が随意的であるからである。

- (2) a. (L-)Am văzut pe domnul Predescu la hotel.
 (I) him-have seen PREP Mr. at (the) hotel
 b. Ieri (l-)ai certat pe Ion.
 yesterday (you) him-have scolded PREP

もし(2)から直接目的語の wh 移動によって(4)が派生するのであれば、クリティックの重複の有無に関して分布の対立が生じるはずはない。従って、前置構文の場合の前置されている直接目的語の統語的位置に関しては、次のように仮定する。

- (9) 直接目的語の話題化構文において、前置されている直接目的語は周辺的位置に merge される。

この周辺的位置に merge された名詞句の格照合は前置詞句内でなされると考えられる。

では、島の制約等はなぜ生じるのであろうか。本稿では、ルーマニア語の話題化構文では空の演算子が移動すると考える。ここで、なぜクリティックの生起が義務的であるのかという問題を説明する必要がある。本稿では、Dobrovie-Sorin (1994) の関係代名詞の分析において提案されている構造を採用し、次のように仮定したい。

- (10) ルーマニア語の話題化構文においては、クリティックが主要部となっている DP の指定部に空の演算子が merge する。

この構造を仮定すると、ルーマニア語においては話題化構文が関係代名詞と同様に演算子が量化詞として機能しないという事実も捉えることができる。CP 指定部に要素が移動していることを示す事実として、話題化構文において wh 疑問詞が生起することが不可能である点が挙げられる⁸。

- (11) a. *Când pe Ion l-ai văzut?
 when PREP (you) him-have seen
 「いつイオンに君は会ったの。」

⁸ Ivana Adrian 氏によると、以下のように直接目的語が疑問詞に先行する語順は文法的である。

- i) Pe Ion când l-ai văzut?
 PREP when (you) him-have seen
 「イオンにいつ君は会ったの。」
 ii) Pe Ion unde l-ai văzut?
 PREP where (you) him-have seen
 「イオンにどこで君は会ったの。」

これは、本稿が扱っている話題化構文ではなく、左方転位構文であると考えられる。この文では疑問詞が文の話題であると同時に焦点となっている。従って、疑問詞に先行する直接目的語名詞句は CP よりも上位に merge され、演算子-変項構造に一切関係付けられない要素であると分析できる。

b. *Unde pe Ion l-ai văzut?

where PREP (you) him-have seen

「どこでイオンに君は会ったの。」

(10)を仮定すると、クリティックの生起が義務的な理由は次のように説明される。話題化構文では、先行詞である文頭の名詞句は演算子と意味的に叙述関係を持たねばならない。これは、関係節の場合と同じものである。この意味的關係を何らかの形で統語的に保証しなければならないが、最小主義理論の枠組みでは、文頭の名詞句と演算子を直接何らかの操作で関係付けるのは不自然である。いずれの要素も名詞句に関わる範疇であるため、いずれか一方が解釈不可能な素性を有しており、もう一方の解釈可能な素性と照合されるとは考えにくいからである。そこで本稿では、主要部Cが文頭の名詞句と演算子を統語的に関係付ける機能を持っていると考え、次のように仮定する。

- (12) ルーマニア語の話題化構文において、主要部Cは文頭の名詞句と演算子のそれぞれの要素に対応する解釈不可能な ϕ 素性を有する。

すなわち、Cが二つの ϕ 素性を有しており、それぞれに対応する名詞句の ϕ 素性と照合されねばならないということである⁹。この場合、叙述関係を持つ文頭の名詞句と演算子（と関係付けられる要素）は同一指示であるので、二つの ϕ 素性は同じものでなければならない。

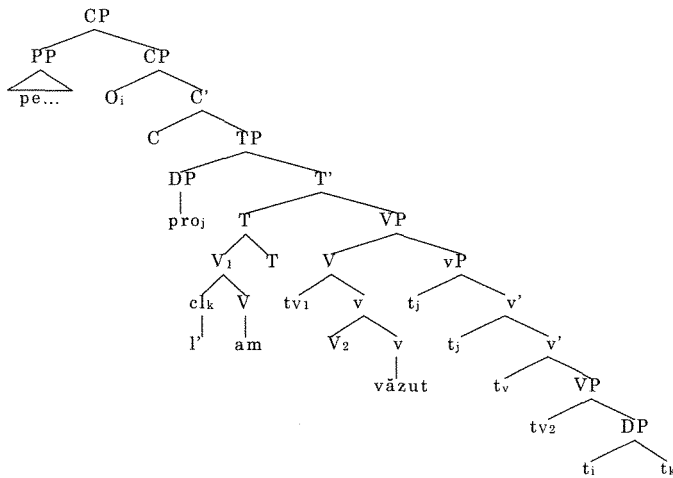
ここで留意すべきは、話題化構文の演算子はDP指定部に生起する要素であり、自身が ϕ 素性を担っているわけではないという点である。従って、それ自体はCと Agree してもCの ϕ 素性は照合されないことになる。そこで演算子と関係付けられる ϕ 素性を持つ要素と Agree しなければならない。その要素がクリティックなのである。Cが Agree によってクリティックと素性照合することによって、統語的に話題化構文が認可されるのである。更に、

⁹ この照合は Chomsky (2000) において提案されている Agree 操作によってなされる。

Cは自身の投射内にある文頭の名詞句と照合する。この際、文頭の名詞句の ϕ 素性がクリティックと異なる場合には照合が適切に行われなため、非文となる。該当する例を(13)に、対応する構造を(14)に示す。

- (13) a. Pe domnul Predescu l-am văzut.
PREP Mr. (I) him-have seen

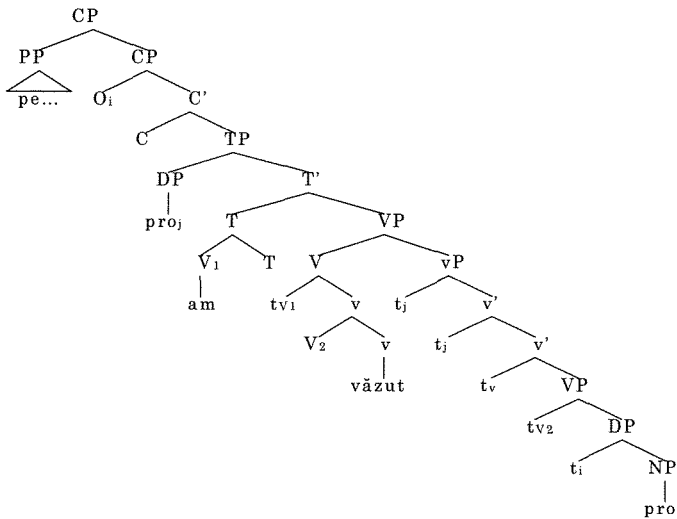
(14)



一方、直接目的語の位置にクリティックではなく pro が生起する場合、すなわちクリティック重複が見られない場合について考えよう。該当する例は(15)に、対応する構造は(16)に示される。

- (15) a. *Pe domnul Predescu am văzut.
PREP Mr. (I) have seen

(16)



この場合も *pro* を支配する DP 指定部に空演算子が生起し、CP 指定部に移動することになる。主要部 C はやはり空演算子と関係付けられる名詞句と Agree しなければならない。しかし、クリティックと異なり、*pro* は顕在構造においては VP の補部にとどまったままである。すると、C と *pro* に Agree を行おうとしても、*vP* が Chomsky (2001) における phase であるため phase 不可侵条件によって両者を関係付けることができない¹⁰。このため C の ϕ 素性が照合されないことになり、クリティック重複がなされない話題化構文は非文となると説明できる。

¹⁰ Phase の定義は以下の通りである。

For strong phase HP with head H, the domain of H is not accessible to operations outside HP; only H and its edge are accessible to such operations.

3.3. 直接目的語が前置詞を伴わない話題化構文の構造

次に、直接目的語が前置詞 “pe” によって標示されない場合を考えよう。“pe” によって標示されない場合に重要なのは、直接目的語が前置されなければクリティックの重複が不可能であるということである。以下に例を再掲する。

- (3) a. * O văd cartea în bibliotecă.
 (I) it see the-book in the-library
 b. * L-am admirat tabloul.
 (I) it-have admired the-picture

これは、素性照合が可能な動詞が一つしかないからである。これに対して、話題化構文においては、無標の直接目的語が前置された場合も直接目的語と同一指示のクリティックの生起が義務的であった。

- (4) c. Cartea *(o) văd în bibliotecă.
 the-book (I) it see in the-library
 d. Tabloul *(l-)am admirat.
 the-picture (I) it-have admired

この事実は、対格で標示される直接目的語の話題化構文の場合も、直接目的語自体が CP 指定部に移動しているのではないことを示している。従って、この話題化構文も、前節で議論した前置詞によって標示される直接目的語の話題化構文と全く同じ構造であると分析できる。すなわち、文頭の直接目的語は周辺的位置に merge され、名詞句の DP 指定部に merge される空演算子が CP 指定部に移動するというものである。前置詞 “pe” が生起する場合の話題化構文と同様に、空の前置詞の場合も wh 疑問詞が生起できないという事実は、空演算子が CP 指定部に移動しているという本稿の分析と合致するものである¹¹。

- (17) a. *Când tabloul l-ai văzut?

when the-table (you) him-have seen

「いつその絵を君は見たの。」

- b. *Unde tabloul l-ai văzut?

where the-table (you) him-have seen

「どこでその絵を君は見たの。」

ここで文頭の名詞句の格照合がどのようにしてなされるかという理論的問題が生じる。この問題を考察する上で示唆的なのは、次の現象である。

- (18) (Pe) Ion l-am întâlnit anul trecut.

PREP (I) him-have met last year

「イオンには私は去年会った。」

(Dobrovie-Sorin(1994))

¹¹ Ivana Adrian 氏によると、この場合、直接目的語が疑問詞に先行すると容認度が高くなる。

- i) ?Tabloul când l-ai văzut?

the-table when (you) him-have seen

「その絵をいつ君は見たの。」

- ii) ?Tabloul unde l-ai văzut?

the-table where (you) him-have seen

「その絵をどこで君は見たの。」

これは、直接目的語が前置詞 “pe” によって標示される場合と同様、左方転位構文であると考えられる。前置詞によって標示される場合よりも容認度が下がるのは、非生物であるために左方転位構文の文頭の要素としては特定性が低すぎるためであると考えられる。実際、指示形容詞を添えて特定性を挙げると容認度が上がる。

- iii) Tabloul acesta când l-ai văzut?

the-table this when (you) him-have seen

「この絵をいつ君は見たの。」

- iv) Tabloul acesta unde l-ai văzut?

the-table this where (you) him-have seen

「この絵をどこで君は見たの。」

通常前置詞で標示される人間を表す直接目的語が話題化構文で文頭に前置されると、前置詞の生起が随意的なのである¹²。この事実が示しているのは、直接目的語が文頭に merge される場合、前置詞 “pe” が存在しなくても同じ意味機能が直接目的語に対して与えられるということである。このことから、本稿では直接目的語が文頭に merge される場合、顕在的な前置詞が生起しない場合には次のような構造を仮定する。

- (19) ルーマニア語の話題化構文において、前置された直接目的語が前置詞 “pe” によって標示されない場合、空の前置詞が直接目的語を支配する。

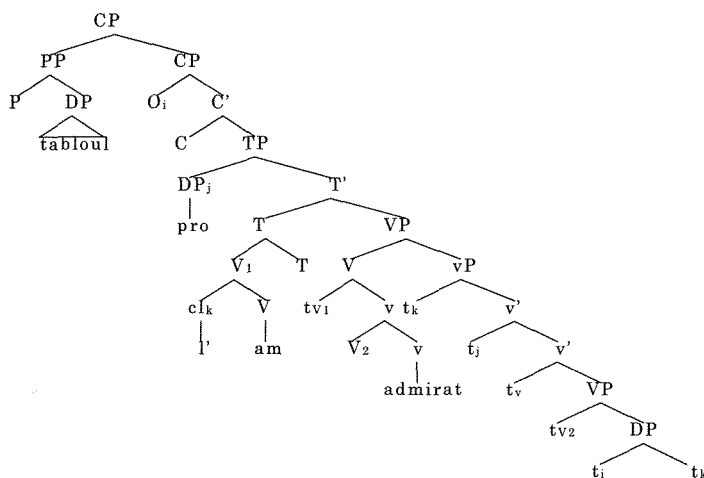
前置された直接目的語の格照合は、この空の前置詞が行うのである。

このように仮定すると、クリティックの生起が義務的である理由は、前置詞 “pe” が存在する場合と全く同じように説明できる。すなわち、主要部 C が空の演算子と関係付けられる名詞句と ϕ 素性に関して照合されなければならない。C は Agree によって ϕ 素性を持つクリティックと一致し、C の ϕ 素性が照合され、叙述に関する統語的条件を満たすのである。該当する例を (20) に、対応する構造を (21) に示す。

- (20) Tabloul I-am admirat.
the-picture (I) it-have admired

¹² この構文における “pe” の随意性については、話者によって判断が分かれるようである。
(18)において “pe” の生起が義務的であると判断する話者も存在する。

(21)



クリティック重複が起こらない以下のような文が非文である理由も、話題化要素が前置詞 “pe” によって標示される場合と同じである。該当する例は(22)である。

- (22) *Tabloul am admirat.
the-picture (I) have admired

この場合、既に議論したように、直接目的語の位置にクリティックではなく pro が生起する。pro を支配する DP 指定部に空演算子が生起し、CP 指定部に移動する。主要部 C は、解釈不可能な ϕ 素性を照合するために、空演算子と関係付けられる名詞句と Agree しなければならない。しかし、pro は顕在構造においては VP の補部にとどまったままであるため、C と pro に Agree を行おうとしても、vP が phase を構成するために両者を関係付けることができない。このため C の ϕ 素性が照合されないことになり、非文となるのである。

このように、ルーマニア語の前置構文を話題化構文であると分析した上で、(9), (10), (12), (19)のような構造に関する条件を仮定すると、クリティック重複現象の複雑な分布が原理に基づいて簡潔に説明されるのである。

4. 関係節

本節では、前節において話題化構文について仮定した認可条件が、関係節においても適用される一般性の高い性質のものであることを示す。4.1でルーマニア語における関係代名詞に対して本稿がどのような統語的特性を仮定するかを示し、4.2で前置詞を伴う対格形関係代名詞によって導かれる関係節の構造を提示し、前節で主張した仮説によって関係節において観察される現象が簡潔に説明されることを示す。

4.1. 関係代名詞の統語的特性

ルーマニア語の関係代名詞節には、他言語には見られない統語的特徴が観察される。まずその特徴を観察した後に、この現象を説明するために本稿が前提とする仮定を提示する。

関係代名詞が関係節において主語の機能をもつ場合、次に示されるように関係節において関係代名詞と重複する主格人称代名詞は生じしない。

- (23) fata care lucrează la poștă
 the-girl who works at (the) post office
 「郵便局で働いている少女」

これに対し、関係代名詞が直接目的語の機能をもつ場合には、関係節においてクリティックの重複が義務的である。

- (24) omul pe care *(I-)am văzut
 the-man PREP which (I) him-have seen

「私が会った男」

この現象を説明するために、まずルーマニア語の関係節の構造をどのように捉えるかを明らかにする必要がある。本稿では、関係節の構造は前節で議論した話題化構文の構造と全く同一であると考ええる。話題化構文の場合と唯一異なるのは、話題化構文では空であった演算子が、関係節では関係代名詞として顕在化している点である。話題化構文では、文頭に merge される名詞句と主要部 C が統語的に関係付けられると仮定したが、関係節の場合には、主要部 C と関係付けられるのは先行詞である名詞句の主要部であると考えることができる。

このように仮定すると、話題化構文と場合と同様に、C は名詞句の主要部の ϕ 素性との照合により自身の ϕ 素性を消去しなければならないということになるが、ここで理論的に問題が生じる。probe である ϕ 素性の Agree のための探査領域は自身の c 統御領域であるが、C の c 統御領域に先行詞の名詞句が含まれないために C と先行詞である名詞句は Agree することはできないのである。そこで、本稿では次のように C の ϕ 素性の照合が Agree とは別の操作で行われると考えたい。

- (25) 関係節において、C の ϕ 素性は主要部同士の一致 (agreement) によって照合される。

この仮定に従うと、関係節の C の ϕ 素性は関係節を支配する NP の主要部である N と一致をすることで照合されることになる。

更に、話題化構文の場合と同様に、この C はもう一つの非解釈素性である ϕ 素性を持っており、この ϕ 素性は演算子が関与する名詞句と Agree によって照合されねばならない。従って、C は同一の二つの ϕ 素性を、一方では自身を支配する名詞句の主要部と主要部一致により、他方では演算子と関係付けられる名詞句と Agree によりそれぞれ照合するということになる。

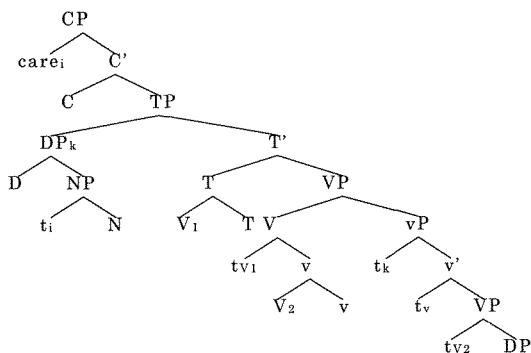
この仮定は、以下のようにロマンス諸語において見られる先行詞と関係代

名詞の性・数一致によって支持される。(26)はルーマニア語の間接目的語の関係代名詞, (27 a) はフランス語, (27 b) はイタリア語, (27 c) はスペイン語, (27 d) はポルトガル語のそれぞれ前置詞目的語の関係代名詞の例である。

- (26) a. doctorul căruia i-am scris
the-doctor whom (I) him-have written
「私が手紙を書いた医者」
- b. studenta căreia i-ați trimis cartea
the-student (f.) whom (you) her-have sent the-book
「君が本を送った女子学生」
- (27) a. les lettres auxquelles je dois répondre
the letters to-which-f.pl. I must answer
「私が返事を書かなければならない手紙」
- b. gli studenti ai quali insegno matematica
the students to whom-m.pl. (I) teach mathematics
「私が数学を教えている学生」
- c. la actriz con la que se casó el ricacho
the actress to(with) whom-f.sg. get married the new rich
「その成金が結婚した女優」
- d. os nossos vizinhos com os quais nos damos há anos
(the) our neighbours with whom-m.pl. (we) get-on for years
「私達が長年付き合っている隣人」

では、この仮定をもとに、関係代名詞が関係節内で主語の機能をもつ場合から派生を考えていこう。Dobrovie-Sorin が指摘しているように、関係詞 “care” は NP 指定部に位置する要素で、主要部の N は空の要素である。演算子として機能するのは “care” のみなので、移動するのは “care” であると考えられる。(23)の構造を示すと、(28)のようになる。

(28)



既に述べたように、関係節の主要部Cは ϕ 素性を照合するため、“care”と関係付けられる主語位置にある空の名詞句と Agree しなければならない。主語位置である TP 指定部はCと局所的な関係にあるので、Agree が問題なく行われ、文法的となる。

このように、関係代名詞が主語である場合には、他言語に比して特殊な状況は観察されない。

4.2. 前置詞を伴う対格形関係代名詞によって導かれる関係節の構造

関係代名詞が関係節において直接目的語の機能をもつ場合、主語の場合と異なり、クリティックが生起しない構造は非文となる。すなわち、話題化構文と全く同じ統語的特性を示すのである。この主語としての関係代名詞を含む関係節と、直接目的語としての関係代名詞を含む関係節の間に見られる相違点は、両者のどのような特性の違いに起因するのであろうか。この問題に答える上で示唆的なのは、後者において関係代名詞が義務的に前置詞 “pe” によって標示されることである。

この事実に着目して、当該関係節の構造を考えてみよう。主語の関係代名詞を含む関係節では、主語名詞句の NP 指定部に位置する関係代名詞 “care” が移動すると分析した。直接目的語の関係代名詞を含む関係節でも同じよう

に“care”が移動すると考えてよいであろうか。ここで考慮に入れなければならないルーマニア語の統語的特徴は、前置詞残留が容認されないという点である。このことから、当該構文では関係代名詞“care”が関係付けられる空の NP とそれを格標示する前置詞とが“care”に随伴して CP 指定部に移動すると考えるのが妥当であろう。

ここで直接目的語が前置詞“pe”によって標示される構文の構造を、クリティック重複を伴う場合と伴わない場合に分けて考察しなければならない。これは、クリティックが名詞句と重複する文と重複しない文とでは統語構造が異なっていると考えられるからである¹³。本稿では、藤田(2003)での同構文の分析に従い、クリティック重複が見られる構文において動詞の項として VP 補部に merge されるのは前置詞“pe”を主要部とする前置詞句であり、これと同一指示の代名詞クリティックはこの前置詞句内に merge されると考え、以下のように仮定する。

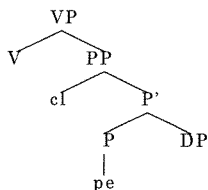
(29) 藤田(2003)における仮定

直接目的語クリティック重複構文において、重複する代名詞クリティックは、前置詞“pe”を主要部とする前置詞句の指定部に merge される。

この仮定に基づくと、前置詞句の指定部に merge された代名詞クリティックは、自身の格照合のために、通常の直接目的語名詞句と同様に vP 指定部に移動することになる。具体的に関与する動詞句の構造のみを示すと次のようになる。

¹³ この点に関する詳細な議論については、藤田(2003)を参照されたい。

(30)



前置詞の目的語名詞句と代名詞クリティックの関係については、単なる同一指示関係ではなく、意味役割を共有している関係にある。従って、ここでは両者が同一の θ 素性を持つことで関係付けられると考える¹⁴。

一方、クリティック重複が見られない文の構造については、クリティックが重複する構文と同じ構造であると考えるのが理論的に自然である¹⁵。この場合の構造も藤田（2003）に従い、以下のように仮定する。

(31) 藤田（2003）における仮定

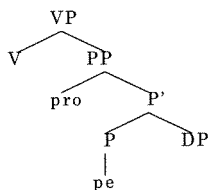
直接目的語が前置詞 “pe” によって標示されかつクリティック重複が見られない構文においては、pro が前置詞 “pe” を主要部とする前置詞句の指定部に merge される。

この仮定に従って、具体的に関与する動詞句の構造のみを示すと(32)のようになる。

¹⁴ θ 素性とは、名詞句が動詞等に関して有する意味役割（ θ 役割）に関する素性である。

¹⁵ この点についても、詳細な議論は藤田（2003）を参照されたい。

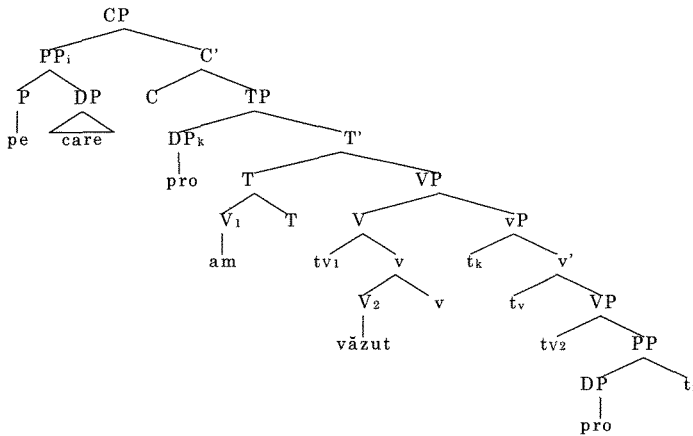
(32)



以上の構造を前提とした上で、関係代名詞が直接目的語である場合の派生を考えてみよう。クリティック重複が起こらない場合、PP 指定部には *pro* が生起する。この *pro* は演算子ではないため、CP 指定部に移動する必要はないので残留する。*pro* が関係代名詞句の主要部の空の名詞と同一の θ 素性を有している点はクリティック重複構文と同じである。関係節が認可されるためには、C がもつ ϕ 素性を先行詞の名詞句のそれと照合する必要があるが、このような名詞句の ϕ 素性の照合は、同一 θ 素性を持つ全ての名詞句と同時に行わなければならないと考えよう。すると、主要部 C は自身の指定部にある空の名詞句と照合するのみならず、VP 補部の前置詞句内に残留している *pro* とも照合するため Agree しなければならないことになる。しかし、Chomsky (2001) の枠組みでは *vP* が phase を構成することから、Agree が実際には不可能であり、非文となるのである。該当する例を(33)に、対応する構造を(34)に示す。

- (33) *omul pe care am văzut
 the-man PREP which (I) have seen

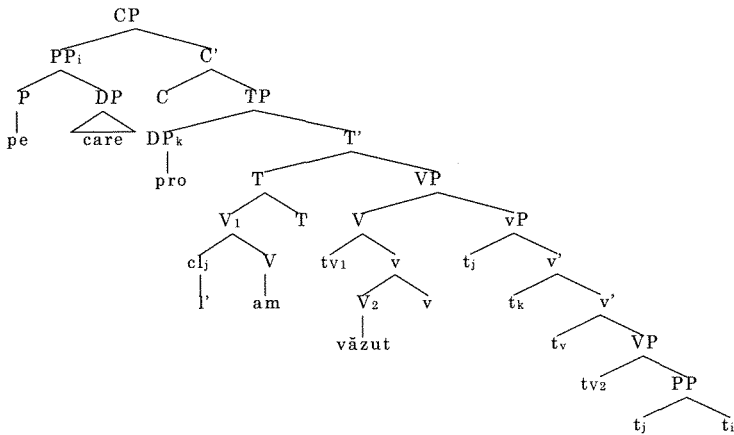
(34)



これに対して、クリティック重複を伴う文法的な文では、“pe”を主要部とする前置詞句の指定部にクリティックが生起する。既に述べたように、クリティックはその形態的特性を満たすため動詞要素に付加しており、この動詞要素はT主要部へ顕在的に移動している。従って、クリティック重複を伴わない構文における pro とは異なり、クリティックがCと局所的な関係にあることから phase 不可侵条件に違反することなく、主要部Cとクリティックの Agree が行われる。これにより、Cの ϕ 素性が照合され、関係節に関する統語的条件が満たされるのである。クリティック重複を伴う文法的な文の例を(35)に、対応する顕在構造における構造を(36)に示す。

- (35) omul pe care l-am văzut
the-man PREP which (I) him-have seen

(36)



このように、藤田（2003）において提案されているルーマニア語の前置詞によって標示される直接目的語を含む他動詞文の構造を前提として、話題化構文において仮定した主要部Cに関する(12)の仮定を関係節にも適用することによって、関係代名詞節の統語現象を簡潔に説明することが可能となる。すなわち、3節で主張した仮説が、ルーマニア語の統語現象を説明する上で一般性を備えたものであるということが言えるのである。

5. 結 論

本稿は、ルーマニア語における直接目的語を前置する構文の統語構造について考察を進めてきた。まず当該構文が統語的にどのように特徴付けられるかに関して、左方転位構文ではなく、wh 移動が関与する話題化構文であると議論した。その上で、話題化構文の具体的な統語構造に関して次のように主張した。

- i) 直接目的語の DP 指定部に空演算子が merge する。

- ii) 文頭の名詞句は CP の周辺部に merge された前置詞句である。
- iii) C 主要部が文頭の名詞句及び演算子と関係付けられる名詞句のそれぞれに対応する二つの解釈不可能な ϕ 素性を持つ。

更に、上記の iii) の仮定が直接目的語の話題化構文のみならず、関係節においても適用される一般性の高い条件であることを議論した。ルーマニア語においては、関係代名詞が関係節で主語の役割をもつ場合にはクリティック重複が見られないのに対して、関係代名詞が直接目的語である場合にはクリティック重複が義務的である。この統語的対立について、直接目的語が前置詞 “pe” によって標示される他動詞文及び通常他動詞文の構造に関して議論した藤田 (2003) において仮定されている統語構造を採用すれば、iii) の条件及び次の ϕ 素性の照合に関する条件を仮定するだけで説明可能であることを提示した。

- iv) 関係節において、C の ϕ 素性は主要部同士的一致 (agreement) によって照合される。

主要部同士的一致による照合は、関係節においてのみ適用される操作ではなく、様々な統語関係を保証するために有効な一般性の高いものである。特に、ルーマニア語をはじめとするロマンス諸語のように、名詞に関わる要素の形態的一致が顕在的な言語においては iv) の操作は極めて有効な手段であると言える。

本稿の直接目的語の前置構文に関する議論によって、ルーマニア語という言語において許される一つの統語構造の可能性を提示することができた。本研究は、ルーマニア語統語論の全体像を明らかにするための一段階と位置付けることができる。今後の課題としては、直接目的語以外、特に間接目的語の話題化構文にも本稿での議論がそのまま適用できるかどうかを検証することが挙げられよう。また、ロマンス語対照言語学の観点からは、他のロマンス諸語、特にルーマニア語と同じように直接目的語の前置詞標示が許される

スペイン語において該当する構文が、ルーマニア語の当該構文と同じように分析できるかどうかを検討することも必要となってくる。これらの問題に関しては、稿を改めて論ずることとしたい。

参考文献

- Burzio, Luigi (1986), *Italian Syntax*, Reidel.
- Chomsky, Noam (1995) *Minimalism Program*, The MIT Press.
- (2000), “Minimalist Inquiries: The Framework,” In Roger Martin et al. (eds.) *Step by Step*, The MIT Press.
- (2001), “Derivation by Phase,” In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, The MIT Press, Cambridge.
- Cornilescu, Alexandra (1987), “A Note on Dative Clitics and Dative Case in Romanian”, *Revue Roumaine de Linguistique* tome XXXII.
- (2000), “Notes of the interpretation of the Prepositional Accusative in Romanian,” *Bucharest Working Papers in Linguistics*.
- Dobrovie-Sorin, Carmen (1987), *Syntaxe du Roumain - Chaînes thématiques*, thèse de doctorat, Université Paris 7.
- (1994), *The Syntax of Romanian*, Mouton de Gruyter.
- (1999), “Clitics across categories: The case of Romanian”, In van Riemsdijk, H. (ed.) *Clitics in the Languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
- Fujita, Takeshi (1999), “Les pronoms clitiques non-réfléchis en français”, *Journal of the Linguistic Society of Japan* 115.
- Gierling, Diana (1994), “Clitic Doubling- Specificity and Focus in Romanian,” In *Virginia Motapanyane*.
- Ionescu, Emil (2000), “The Role of PE in the Direct Object Construction in Romanian,” *Bucharest Working Papers in Linguistics*.
- Jaeggli, O. (1986), “Three Issues in The Theory of Clitics: Case, Doubled NPs, and Extraction, In Borer, H. (ed.) *The Syntax of Pronominal Clitics*, Academic Press.
- Jones, M.A. (1996), *Foundations of French syntax*, Cambridge University Press.
- Kayne, Richard S. (1977), *Syntaxe du français*, Seuil.
- (1991), “Romance Clitics, Verb Movement, and PRO”, *Linguistic Inquiry* 22.
- Legendre, Géraldine (2000), “Optimal Romanian clitics: a cross-linguistic perspective”, In Montapanyane, V. (ed.) *Comparative studies in Romanian syntax*, North-Holland.

- Luján, Marta and Claudia Parodi (2001), “Clitic-doubling and the acquisition of agreement in Spanish”, In Gutiérrez-Rexach, J. et al. (eds.) *Current Issues in Spanish Syntax and Semantics*, Mouton de Gruyter.
- Pesetsky, D. (1987), “Wh-in-situ: Movement and Unselective Binding,” In E. Reuland and A. ter Meulen, eds., *The Representation of (In)definiteness*, MIT Press, Cambridge.
- Roberts, Ian (1997), *Comparative Syntax*, Arnold.
- Torrego, Esther (1998), *The Dependencies of Objects*, The MIT Press.
- Uriagereka, Juan (1995), “Aspects of the Syntax of Clitic Placement in Western Romance”, *Linguistic Inquiry* 26.
- 藤田 健 (2003), 「ルーマニア語における “pe” 構文の統語構造」, 『北海道大学文学研究科紀要』第 110 号.